

うちかつ心——中村 久子

なかむら ひさこ

おひとつ、おひとつ、おっさらえ。

※1 石でできたチヨーク

のようなもの

おひとつ、おひとつ、おっさらえ。

※2 石でできた板で黒板
のようなもの

久子の家に、近所の友だちが遊びに来て、お手玉遊びをしています。

久子は、友だちのきょうな手つきを見ながら、お手玉の歌を歌っています。

「わたしも、お手玉遊びがしたいなあ。」

久子には、お手玉をつかんだり、ほうり上げたりする手がないのです。

久子が、もうすぐ三才になるうとする明治三十三年（一九〇〇年）の秋に、

久子の手足は急にむらさき色になり、ほうっておくと、うんでくさってしま
う「とつぱつせいだつそ」という病気になったのです。それで、手術をして、
りょうてりょうあし
両手両足を切りとってしまったのです。

学校に行けない久子は、針仕事をするおばさんのそばで字をならいました。

肩から少し出ただけの短いうでにほうたいをまき、そこに石ぼく※₁をはさ
かた
んで、小さな石板※₂に書きました。書きたびに、石ぼくを落としたりしない
せきばん
ように気をつけなければなりませんでした。

久子が十才になったころのことです。

母は、着物などの衣類を両手いっぱいにかかえてきて、久子の前におくと、
きもの
いるい
りょうて
「かあさんだけでは、とてもほどこきれん。久子や、少しでもいいから手助け
てだす
しておくれ。」

と言いました。

久子は、山ほどつまれた衣類を、どのようにほどこうかと、ながめるばかり

でした。

わきの下に、ほどこき物ものをはさんで、なんとか、口にくわえたはさみで糸を切ろうとするのですが、そでやえりのところになると、とくにじょうぶにぬってあるので、かんたんにはほどこけません。とうとう久子は、

「おかあさん、ここだけ切って。」

とたのみました。

しかし、母は、

「もう少し、がんばってごらん。」

と言うだけでした。

久子は、どうやっても糸をほどこくことができない自分が、くやしくなりました。また、こんな体の自分をたす助けてくれない母を、つめたい親だとも思いました。

それでも、久子は、また、ほどこき物ものをわきの下にはさんだり、口にはさみをくわえたりしながら、ほどこき方を考えました。口には血ちがにじみ、食べ物ものを口に入れるとひりひりといったみました。たびたびなげ出そうと思いました。それでも、何度なんども、何度なんどもはさみをすべらせたり、おとしたりして、やっと、糸のぬいめを少しずつ切っていくことができ始めました。

そして、とうとう、一まいの着物きものをほどこくことができました。

「おかあさん、ほれ、ほどいてしまったよ。」

と言う久子の元気な声に、母は、目になみだをうかべて、何度なんども何度なんども大きくうなずくのでした。

それからは、口に針はりをくわえて着物きものをぬう練習れんしゅうもしました。着物きものの糸をほどこより、もつともつと苦勞くろうをして、何年もかかりながら、やっと、思うような着物きものがぬえるようになりました。



こうして、久子は、ふでで字を書くことも、人形をつくることも、料理する^{りょうり}ことも、たいていのことはできるようになりました。

内容項目 一―(二)

出典 岐阜県教育委員会 きょうどのどとうとく「うちかつ心」

(昭和六十一年七月)